

幼児とともだち

山 下 俊 郎



幼なともだちという言葉がある。まことになつかしいひびきを持つて、わたくし達の胸に、幼なかつた日の友の姿をよびさましてくる言葉がある。しかし、ここではこういつたなつかしい味をこめた友達のはなしをするわけではない。少し冷たい分析を試みて、教育の問題を考えてみようというわけである。

一、ともだち心の発生

赤ちゃんとは別にともだちを求めない。自分と同じレベルの子どもというものを、まだちつとも求めないのである。では、何才ごろから、ともだちを求める心が芽生えるであろうか。

ふつうの心の発達をとげている子どもであれば、およそ満三才ごろになると、積極的にともだちを求めるようになる。そして、ふつうの子どもであれば、赤ちゃんの

時から、自分の方で積極的なともだち心を持つていなくても、近所の子どもたちと何かの形で交渉があるから、このことがあまりはつきりと眼立たない。いつのまにかともだち遊びの中に、スツポリと入りこんで行つてしまつているのである。

ところが、近くの子どもとあまり交渉のないような環境に育つと、このことが眼に見えてはつきりとわかる。わたくしは、長女がちょうど満三才になつたころ、東京の本郷でお邸町といわれる西片町の片隅に住んでいたのであるが、近所の子どもとの交渉がまるでなかつた。相手がいないのである。しかし、たまに通りがかりの子どもが、表の通りで何か話し合つていたり、道ばたで何かの遊びを展開したりすると、長女が垣根のすきまから食い入るように、じつと外の子どもの様子に眼をこらし、夢中になつてみていたことを思い出す。子どもの心に、

濃厚なともだち心が芽生えていたのである。

こういつたような、まわりとの交渉の絶たれた環境にいる一人子などには、ときとして「想像の友だち」といわれる現象がみられる。子どもが、心からつよくともだちを求めているのに、現実の生活ではこのともだち心が満されないために、自分の心の中で「想像のともだち」を作るのである。「想像の友だち」は、子どもにとつてはほんとの友達とおなじである。姿のないともだちとあるいは語り、あるいは手をとり合い、あるいは肩を組んで、一緒に行動する。まるでほんとの友達がそばに生活しているようである。ある一人子の母親は、この「想像のともだち」が子どもにできたのをみて、「うちの子どもは気が狂つたのではないでしようか」といつて、わたくしの所へ相談に来た。一般に一人子には想像のともだちが、ひじょうに多いといわれている。

このような「想像のともだち」ができるということはこの年ごろになつて芽生えてくるともだち心が、何かの形で満されないではやまないというくらい、誠に強いものであることを物語つている。どの子どもも、順調に成長している限りは、三才ごろになるとこのようにつよいともだち心を現わすようになるものなのである。昔の幼稚園令でも、今日の学校教育法でも、幼稚園に入園する年齢は満三才ということになつている。この年齢がどう

いう根拠で定められたかは、いろいろな人に聞いてみてもあまりはつきりした答が得られない。しかし、おおよその見当でそうきめられたというのなら、その衝にあつた人々の勤は今日の心理学でいつている所とピッタリと合つているのに驚く。

子どもは、ともだちを求める心をもつている。このともだちを求めるといふ要求はちようど三才のころにつよく眼ざめるのである。

二、ともだち心の成長

一口にともだち心といつて来たが、ともだち心にはおのずから成長の順序がある。このことを今度は考えてみよう。

ともだち心の成長の姿は、子どもの遊びの様子に現われる。赤ちゃんから二才ごろまでの子どもの心には、ともだちと遊ぶという心がまるつ切りない。遊ぶときにはまるつきりひとりだけが遊んでいる。独り遊びなのである。子どもの心にともだち心がきざしはじめてくると、子どもの心はほかの子どものやつてゐる遊びに心がひかれるようになる。ちようど前に述べたわたくしの長女の例がこれにあたる。ほかの子どものしてゐる遊びをわきから一生けんめいに見ているのである。わたくし達はこの状態を傍観といつている。さらにもう少し、ともだち

心が成長してくると、「並行遊び」といわれる状態が見られるようになる。並行遊びの一番いい代表は砂場遊びにみられる。一人の子どもが砂場に入り込んでお団子を作つて、セツセと砂場のわくの上に団子をならべている。

これをみたもう一人の子どもが、その子のわきに坐り込んでまたセツセと団子作りをはじめめる。しかし、この二人はお互いに話するでもなし、団子の売り買いゴツコをするでもない。まるで平行線みたいにお互いに交わらないのである。ただ遊びのはじまつたキツカケが、ほかの子どものやつている遊びにある。これに刺戟されて遊びがはじまつたというだけである。この遊び方が並行遊びといわれるのである。さらに今度は、もう少し友だち心が熟してくると、はじめて子どもどうしおたがいの間に交渉のある遊び、すなわち集団遊びが生れる。みんなと一緒になつて遊ぶようになるのである。この集団遊びにもただみんなが一緒にいて遊ぶというだけの連合的遊びといわれるものと、仲間のあいだに組織があつて受持ちのわかれてる組織的遊びといわれるものが分けられることもある。

ともだち心はこのような順序で成長する。すなわち、
独り遊び↓傍観↓並行的遊び↓集団遊び（連合的遊び↓組織的遊び）という順序なのである。そして、一般のどもの年齢にとまなり発達をみると、二才台では独り遊

びが圧倒的に多い。そして三才台になるとそろそろと集団遊びが頭をもたげてくる。西才すぎると集団遊びがはるかに他の遊びを圧倒するようになる。いまここにいつた成長には、傍観や並行遊びがないが、この二つは二才児に少しあり、三才児になるとやや少くなるが、西才児になるとグツと少くなるのが、普通である。そして、このように各年齢にいろいろの型の遊びが散らばるといふのは、こういつた友だち心には子どもによる違い、すなわち個人差というものがひじょうに大きいことを意味するものである。

三、ともだち心のひろがり

このようにして幼児のともだち心は成長する。けれども、一体、幼児のともだちのひろがりというのはどのくらいのものであろうか。

ごく一般的にいうと、三才から六―七才くらいまでの幼児のともだちのひろがりというものは、ひじょうにせまいものである。自然のままの、ありのままの姿で、子どもが自発的に一緒になつて遊べるともだちの数を調べた心理学者の研究によると、そのひろがりにはひじょうにせまい。このくらいの年ごろの子どもが、自発的に作つて遊んでいるグループの人数は、一番多いのが三人、次が二人と四人である。まず大部分のグループは二人、三

人、四人のグループなのである。だから、相手にできるともだちの数は、せいぜい一人から三人くらいのが大部分だといえるわけである。これ以上の人数で一緒に遊ぶことも、あるにはある。しかし、それはきわめてまれなのである。

そして、三才よりも四才、四才よりも五才という風に年齢が多くなれば、それにともなつて、相手にできるともだちの人数は多くなることは事実である。しかし、それにしても、六―七才までは、やはり相手にできる人数は右の範囲をそれほど出ないことが多いのである。

したがつて、幼児のともだち心のひろがりには、少なくともある一つの時間を区切つて考えればひじょうにせまいものなのである。一度にたくさん相手の相手を持つて遊ぶことのできないのが幼児の姿であるといつていいわけである。

四、ともだち心の深さ

そういつた状態に在る幼児のともだち心の深さはどんなものであるう。ひじょうに仲よしの友達というようなものが、ほんとにあるのであろうか。

このことは、子ども達がどういつた条件のときに一緒になつて遊べるかということの分析からまず考えられる。どんな子どもとどんな子どもがおともだちになれ

るか。今まで調べられた研究の結果によると、それは似たもの同志がともだちになるということになる。すなわち、男の子は男の子どうし、女の子は女の子どうしという風に同性同志、年齢からいうと同じ年齢同志、したがつて知能や運動の能力からいつて同じ程度のもの同志、また性格からいつても似たもの同志がともだちになりやすいのである。そして、こういつたことを考えると、子ども達のともだち心をどういう風にしたらひろげられるかという手がかりがここから得られるであろう。

さて、次にもう一つ大切なことがある。それは、どういつた条件で子どもたちが一緒になつて遊ぶようになるかということである。子どもたちが一緒になる条件の第一は遊びである。遊びに向く心が同じであれば、その遊びによつて子ども達は結ばれる。第二の条件は遊具である。同じ遊具に同じように心が向いて行けば、その遊具によつて子ども達は結ばれる。第三の条件は、大人の存在である。大人がなかだちをすれば、子ども達は大人によつて結ばれる。

そして、このように遊びにより、遊具により、大人によつて結ばれる子ども達のともだち心の深さは、このなかだちによつて結ばれている。したがつて、このなかだちがなくなると、つながりが消える。この結びつきはほんの一次的なものであつて、そのときどきによつて変る

ことが多いのである。ある子どもとある子どもがしじゅう一緒に遊んでいて仲よしであるというようなこともあるにはある。しかし、それはどちらかといえば、特殊な条件がある場合でもあつて、少ない部類に属する。したがつて、子ども達の結びつきを作る条件としての遊びや遊具、そして大人の存在というものはひじょうに大切な意味を持つものである。一緒になれるような遊びを与えてやり、一緒になれるような遊具をしつらえてやるということが大切である。そしてさらに、大人のもつ意味はもつと大きい。子ども同志お互いを結びつけてやるものは、大人だからである。子どもの中に立つた一人の大人は千手観音のようにたくさんの手を、しかも見えない手を、子どもたちの心に差し出しているわけなのである。この手がなかつたら、子どもたちは、バラバラの縁のない子どもになつてしまふのである。

五、ともだちと教育

幼児のともだち心の有様とその成長とを一通りのべて来た。その心はいかにも貧しいものである。このまづしい心を育ててやるのが教育であるが、貧しくともともだちそのものの中に教育的意義がある。

幼児の心は自己中心の心的であるといわれる。自分のことだけしか考えないのである。少なくとも、まず自分のこ

とへ心の向うことの方が強いのである。ひとの立場というようなものをあまり考えないのが幼児の心であるといえる。こういつたせまい心をもつたのが、これから成長しようという幼児の姿なのである。わたくし達はこのことをまず第一に念頭におきたいと思う。

ところで、この自分のことに強く向いている心を少しづつでも、ひとのことの方へ向けてくれるものはともだちである。ともだちと遊ぶことによつて、子どもの心はだんだんとひとの立場、ひとのことを理解するようになる。そして、このように向けて行くのにひじょうに都合のいいことは、自己中心の心の中に、ともだち心が芽生えてくることである。幼児の心の中には相対立する矛盾がふくまれてゐる。これをだんだんに合うようにして行くのが成長である。子ども達はみずからも成長する力をもつてゐる。しかし、それをさらにすすめて行くものは大人であり、大人の手になる教育的営みである。

ともだち心をひらいてやる、ともだち心をのばしてやる、ともだち心をひろげさせる、ともだち心を深めてやる、いずれも大人が手をそえてやると一段とすすめてやれることである。わたくし達は、幼児たちの友だち心を育てよう。その自然の歩みの姿をしつかりと心の中に植えてつけておきながら、その育ちをすこやかに進めて行くようにしたいと思う。